

[講演]

「創っていく」 協同組合運動を

堀越芳昭（日本協同組合学会会長・山梨学院大学教授）



レイドロウ報告の問題提起

1960年代、70年代の国際協同組合運動は経営主義、構造改革の路線の方向に傾斜していった時期であった。それに警鐘を加えて、協同組合のあり方について、方向転換を図ったのが1980年のICA（国際協同組合同盟）総会におけるレイドロウ報告だった。

18世紀から19世紀にかけての古い産業革命は、機械の発明と大工業の成立によって、労働のあり方が変わった。単なる技術革命だけではなく、労働のあり方が一変し、それまでの農民や職人の自営的な自己労働の段階から、大工業における雇用労働の段階に変わって、従属化されていった。その労働の問題を解決しよう、人間性を回復しようとしたのが労働運動であり、労働組合運動であった。その後200年位経ち、単なる雇用労働ではなく、自らが労働を生み出し、経営に

も責任を持つ新しい働き方が展開しつつある。そうした意味で、協同労働が新しい産業革命の下で進行しつつある、とレイドロウは言ったわけで、その担い手が労働者協同組合である。ICAの歴史の長い中で、本格的にワーカーズコープの評価を出したのは、このときだった。

アダム・スミスと「共感」

現在は地域社会が本当に疲弊している。19世紀には地域社会がまだまだ強く残っていた。それで19世紀にドイツ、フランスと協同組合が勃興していく。現代は19世紀に似ているといわれる。竹中平蔵を始めとしたシカゴ学派の経済学者は、19世紀に戻れという発想で、あの時代の自由経済に戻ることを進めている。日本では19世紀といえば明治30年代から大正の初期で資本主義の形成期であり、現在と似ているところもある。「アダム・スミスに戻れ」というのも10年ほど前からアメリカの新古典派経済学の中で強調されてきた。確かにアダム・スミスは、利己心を持った個人を出発点として社会を構想し、利己心を前提としていかに円滑な経済活動が可能かと考えた。それを唯一可能たらしめるものは「共感」である。他者に共感する感情を持つことで、初めて利己心を持った人間が経済活動が可能となる。共感がなければ経済秩序は解体してしまうという認識だった。現在の日本と19世

紀が似ているのだとすれば、我々ももう一度、共感、協同という問題を軸のひとつに据えない限り、経済も円滑に進んでいかない。

協同組合運動は創っていく段階

しかし19世紀との大きな違いは、当時は協同社会を具体的にイメージすることができたが、現在はそれができない。19世紀は協同組合運動の生成期だった。20世紀は発展期で、ILOの生まれた1920年代から30年代は協同組合も大きな発展をした。日本では世界的な経済不況の中で、自己防衛運動という形で協同組合運動を行った。

現在の協同組合運動は20世紀の自己防衛運動でもなく19世紀の共同体的なものの復活運動でもない。ここに非常に難しさがある。レイドロウに即して言うならば、4つの優先課題を形成し創っていく運動の段階であろう。日本の雇用労働が危機的な状況になっていることが、様々に報告されたが、今は労働自体が危機的な状況になる中で、協同の実体を創りあげていく時期であり、参考になるモデルはないかもしれない。創っていく運動は非常に困難であるが、レイドロウは「地域社会で創ろう」と提起して「そこであれば可能だ」と言った。それから24年経つが、これを追求していくことが一貫して課題である。

私も協同組合研究を始めて今年で38年になる。庶民の金融を学び、役立つものをつとむことでこの分野に入った。自分たちの問題を主体的に自分たちで協同で実現していく協同組合に触れて、38年経った。今、どういう時代にあるかしっかり把握することが求められている。

戦後改革の成果から新たな提案を

また、今の時代の特徴として、戦後改革の最終的清算の時期と見ることもできる。農協や生協などの協同組合制度は、戦後改革によって産み落とされ、その成果の上に成り立っている。その後60年近く経ち、その「よき成果」がなし崩しにされ、あと2、3年で最終的に決着をつけ、清算の段階に入ろうとしている。それに対して、積極的な提案ができない限り、対応はできない。戦後改革の基本精神を継承し、新たにそれをしっかりしたレベルで提案、建設していくことが必要だ。協同組合の問題で言えば、農協・生協という戦後改革の成果の上に立って、さらに超えていく提案が出されない限り、負けてしまう。その提案が労働者協同組合でありその法制であるとするならば、戦後改革の成果から、新たに創る運動と言えるのではないか。

そういう意味で、今日の提案を含む労働者協同組合の提案を私たちも深め、研究の分野でも役割を果たしていきたい。